

留学生が日常生活における日本語使用を振り返ったときに 強く印象に残っている接触場面は何か

What Kind of Contact Situations are Impressive for International Students When Looking back on the Language Use in Daily Life

甲斐 晶子^{*1*2*3}, 松葉 龍一^{*3}, 合田 美子^{*3}, 鈴木 克明^{*3}

Akiko KAI^{*1*2*3}, Ryuichi MATSUBA^{*3}, Yoshiko GODA^{*3}, Katsuaki SUZUKI^{*3}

^{*1} 熊本大学大学院

^{*2} 桜美林大学

^{*3} 熊本大学

教授システム学専攻

^{*2} J. F. Oberlin University

教授システム学研究センター

^{*1} Graduate School of
Instructional Systems,
Kumamoto University

^{*3} Research Center for
Instructional Systems,
Kumamoto University

Email: kai@obirin.ac.jp

あらまし：日本の大学で学ぶ留学生が日常生活の中でどのような言語接触場面における出来事を印象深いものとして挙げたかを調査した。最も多く挙げられた場面は大学内であり、その他は商業サービスや飲食店等を利用した際の接客を受けた経験が多く挙げられた。学外においては初対面の相手との一時的な対話が多く、交流を深める等のコミュニケーションが不足している実態が明らかとなった。

キーワード：日本語教育, 言語接触場面, リフレクション, 自己主導学習

1. はじめに

外国語能力の習得は教室内での授業と教室外での外国語との接触が組み合わされた時に最も早く進む⁽¹⁾とされており、教室外での日本語接触場面研究が複数なされている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。うまくできた、できなかったという強く印象に残る出来事を経験すると、それが強い動機づけとなり学習意欲が増す場合がある。一方で、ただ負の失敗感だけを得ると挫折や諦めにつながるおそれもある。接触場面での自らの言語使用について自己省察することは、成功から秘訣を見出したり失敗から学んだりといった過程を経て学習者のビリーフ（言語学習について抱いている信念）に肯定的な影響を与えると期待できるが、日常の中では言語接触場面での言語使用について省察を行わないまま忘れてしまいがちである。

筆者らはリフレクションの記入と深化を促す対話型 e ポートフォリオ・モジュールの開発に取り組んでいる⁽⁵⁾。適切なタイミングで、記録しやすいツールにより記録を促すことで、日本語使用について内省を行う機会が提供できる。そのために、筆者らは省察を促す適切なタイミングについて検討するための予備調査を行っている。

印象深い日本語使用はその後の学習に影響を与える可能性が高いが、どのような接触場面での出来事が日本語学習者の記憶に強く残るかについての先行研究は少ない。そこで、今回は特に強く印象に残る出来事がどのような状況、場面で起こっているかについて調査した。

2. 方法

調査の対象者は日本国内の A 大学に通う留学生 16 名（中国 15 名、香港 1 名、日本語能力試験 N2～

3 レベル）である。総合的な日本語運用能力をつけることを目的とした授業において、リフレクション活動時に記述した内容について、後日学生の手承を得たうえで合計 138 件（学生 16 名に対して継続的に 12 回実施された合計 192 件のうち 71.9% が回収できた）のリフレクション記録を分析した。

リフレクション記録は質問に回答する形式で記述するものであり、「日本語を使ったコミュニケーションで、特に印象に残った出来事を複数挙げてください」という冒頭の質問からその詳細を尋ねていく質問が続く。記述された場面について分析を行った。

3. 結果と考察

結果を表 1 および図 1 に示す。記述された場面は 10 のカテゴリーに分けられた。記述された日本語接触場面 136 件中、91 件が日本人と話したことを挙げた。留学生と日本語で話したこと（7 件）を含めると、全体の約 72% が「話す」場面であった。

大学内では教員との会話（9 件）、日本人学生との交流（8 件）が多く挙げられた。対象者の在籍大学には自律学習のできる選択授業があり、そこで日本人学生と会話練習をしたことが複数回記述されていた。

大学外については、商業施設や飲食店で接客を受けた際に、日本語が通じなくて苦労した経験が多く挙げられた。対話相手は初対面の接客業務従事者が大多数を占め、接客を受ける目的でのその場限りの言語使用が目立った。故障対応や商品の返品、不意の来訪者対応等の非日常的な出来事が報告された。留学生達は日本の生活にある程度慣れて定型的なやり取りは問題なくこなせるが、予期しない出来事にはうまく対処できず、その際に感じた悔しさや、受けた親切が強く印象に残ったようだ。

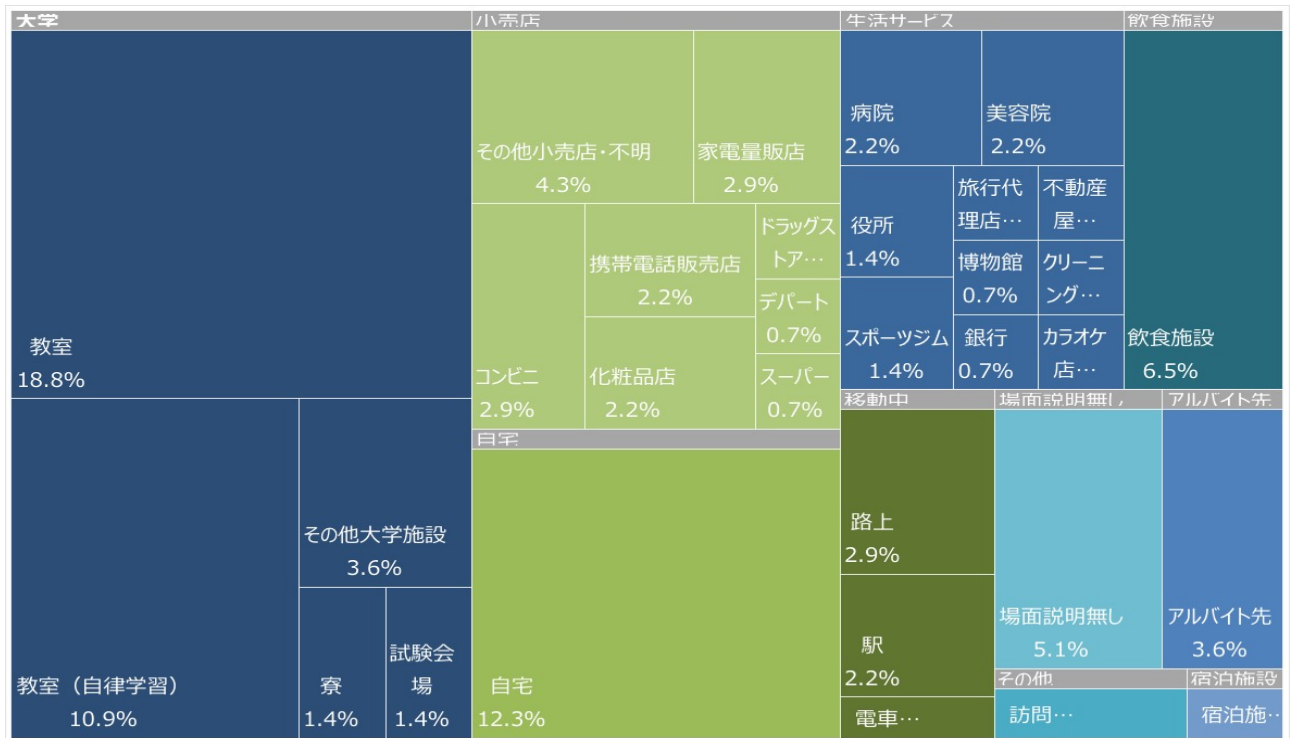


図 1 留学生が強く記憶する日本語接触場面の内訳

なお、対話でないものには、聞いて理解できたとき、メールでのやり取り、ネットショッピング、授業での知識獲得、日本文化を知ったこと、新しく知った語彙や表現の獲得等が記述されていた。

4. まとめと今後の展望

今回の調査では、留学生は印象に残る言語接触場面について「話す」体験を多く挙げるのが判った。特に、予期せぬやり取りを成し遂げた（または失敗した）体験については鮮明に記憶に残るようである。また、今回の調査では日本で生活している留学生でも日本語使用は接客場面での一時的なやり取りが主であり、継続的な相手との交流目的の日本語使用が不足している可能性が明らかになった。数少ない日本語を話す機会をいかに増やすか、またその対話が起ったタイミングを検知しいかに内省を促すかについて検討を進めたい。

日本語使用の機会を増やすには、本人が今後の行動を変えようと思うことが重要であり、そのためにも普段の行動の内省が必要である。適切なタイミングで内省を促すには、例えば心拍数等の生体反応で非日常的な出来事に遭遇していることを検知し、同時に日本語を使用したことが確認できた際にそのしばらく後で働きかける等の支援が考えられる。

今後は日本語接触を経験した学習リソース(人的, 物的, 社会的)の分析や感情分析, 日本語運用能力との相関分析等さらに同データの分析を進める。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 16K21342 の助成を受けた。

表 1 記述された接触場面の分類

接触場面	件数 (降順)	主な対話相手
大学	50 件(36.2%)	教員, 授業ゲスト
小売店	23 件(16.7%)	販売員
自宅	17 件(12.3%)	配達員
生活サービス	16 件(11.6%)	係員, 医師
飲食施設	9 件(6.5%)	店員
移動中	8 件(5.8%)	駅員, 道案内
場面言及無し	7 件(5.1%)	独学の感想
アルバイト先	5 件(3.6%)	同僚, 客
その他	2 件(1.4%)	知人
宿泊施設	1 件(0.7%)	給仕
総計	138 件(100%)	

参考文献

- (1) Ellis, R., & Ellis, R. R.: "The study of second language acquisition", Oxford University (1994)
- (2) ネウストプニー, J.V.: "新しい日本語教育のために", 大修館書店 (1995)
- (3) 田中望, 斎藤里美: "日本語教育の理論と実際: 学習支援システムの開発", 大修館書店 (1993)
- (4) 片山智子, 菅智穂: "日本語初級学習者の接触場面に関する実態調査", ポリグロシア (立命館アジア太平洋研究センター), 第 19 巻, pp.79-89 (2010)
- (5) 甲斐晶子, 根本淳子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明: "LINE BOT API を用いた留学生のための対話型 e ポートフォリオ・モジュールの設計", 教育システム情報学会(JSiSE)2016 年度第 2 回研究会研究報告, pp.69-74 (2016)